【論文５】

原始仏教聖典に記された釈尊の雨安居地と後世の雨安居地伝承

岩井　昌悟

【0】はじめに

［1］原始仏教聖典資料によって釈尊の伝記を再構成しようと試みるに際して、釈尊が35歳で成道して80歳で入滅されるまでの45回の雨期（雨安居）をどこで過ごされたかは重要な鍵になる。釈尊が第何年目の雨期をどこで過ごされたかが明らかになれば、その場所で起きた事件やその時釈尊によって説かれた説法の内容などを調査することによって、芋づる式にさまざまな事柄がわかってくる可能性が存するからである。その時には我々が作成してきた『原始仏教聖典の仏在処・説処一覧』（本「モノグラフ」第２号、第４号、第５号参照）も大いに力を発揮するはずである。

［1－1］しかし既に45回の雨安居を釈尊がどこで如何なる順序で過ごされたのかをほぼ確定しているものとして、釈尊伝を著された諸先学がおられる。E. J. Thomas (1) 等がその代表であろう。これらの方々がその際に根拠にされた伝承が、以降本稿で「雨安居地伝承」と呼ぶものである。雨安居地伝承には種々のヴァリエーションがあるが、これらは我々が「原始仏教聖典」と呼ぶ資料に記されたものではなく、後世に成立した、例えばアッタカター等に散見されるものである (2) 。

我々がそれらから得られる情報を信頼できるものとして扱い、それに基づいて作業を行うことができるならば、釈尊伝を再構成する作業は飛躍的に進展すると思われる。例えば、これらの伝承が言うように釈尊がはじめて祇園精舎で雨安居を過ごされたのは成道後第14年であるとすることができるならば、祇園精舎で起きた事蹟は少なくともそれ以降である可能性が高いと推測され得るからである。

しかし雨安居地伝承は、例えば釈尊の晩年の25年間の雨安居を最後の雨安居地を除いて全て舎衛城の祇園精舎あるいは東園鹿子母講堂とするが、もしそうならば釈尊はその間王舎城やヴェーサーリーで一度も雨安居を過ごされなかったことになり、これは信じ難い。従ってこれらの伝承は果たして信頼するに足るものであるかどうか疑わしい。

(1) E. J. Thomas, *The Life of Buddha as Legend and History,* London, 1927. なお『望月仏教大辞典』第六巻「大年表」に夏坐の年代が記されている。G.P.Malalasekera, *Dictionary of Pāli Proper Names,* PTS, 1938 にも、いくつかの項目でこの伝承を踏まえた記述が見られる。

(2) この「雨安居地伝承」は学界に紹介されてから久しく、また諸先学によって既に数種ある雨安居地伝承の比較対照もなされている。しかしながらこの伝承の歴史的価値は確定していない。諸先学の業績としては、望月信亨「佛陀成道四十五年間に於ける安居の地點」『佛教研究』（第一巻第二號）1937年　pp.001～010；水野弘元『釈尊の生涯』春秋社　1960年　増補1972年　pp.314～318；前田惠學『原始仏教聖典の成立史研究』山喜房仏書林　1964年　pp.070～072；中村元『ゴータマブッダⅠ』中村元選集〔決定版〕第11巻　春秋社　1992年　pp.533～543 がある。なお雨安居地伝承に従って釈尊伝を構成すると、釈尊の最後25年間の事蹟を年代順に記すことは放棄される。それはこの伝承では釈尊が最後の25年間を、最後の雨安居を除いて全て舎衛城で過ごされたとするからである。

［1－2］そこで本稿では、まず雨安居地伝承のヴァリエーションを整理し、しかる後に原始仏教聖典の記述を調査することを通して雨安居地伝承と原始仏教聖典の記述の一致不一致を明らかにして、雨安居地伝承が果たして信頼することができるかどうかを確認するための材料を提供することにしたい。

［1－3］我々の研究はまだ、例えばこれらの伝承がどのように成立してきたのかという形成史の問題などにまで進んでいないので、残念ながら本稿において最終結論を得ることはできないが、続く論文においては原始聖典に記された雨安居地それぞれにおける釈尊の事蹟を詳細に調査した上で雨安居地伝承の信頼度を如実に示したいと考えている。

もちろんこの研究の目指すところは原始仏教聖典資料に基づいて釈尊伝を再構成することにあり、これがその土台となる一つの作業であることは言うまでもない。